

# 欧米における日本中世文学の研究と紹介

福田 秀一

要旨 欧米における日本文学の研究や紹介（翻訳等）の状況を見ると、いわゆる古典文学の分野では、中世文学に対する関心がかなり強いように見受けられる。今回はそれについての若干の統計やデータを示した上で、欧米において日本の中世文学がどのように研究・紹介されているか、多少の解説と考察を試みた。特に、日本文学の時代区分に「中世」の語を用いているものが少いことは注意される。



## 一、はじめに

日本の中世文学は、海外でどのようなものがどの位研究されているであろうか。あるいはまた、どのようなものがどのように翻訳され解説・紹介されて、専門家や一般読者に受容されているであろうか。そしてそこに、日本中世文学の特質が多少とも見られないであろうか。またかりに、そうした特質が顕著に見出されなくとも、海外の研究者が日本文学に関する研究や翻訳・解説などを公にした際に、その内容や出来ばえについて、日本の専門家（いわゆる国文学者）からの批評・批判がほとんどないという不満や淋しさをよく耳にすることを思えば、冒頭のような問題について、ある程度われわれは知っていてもよいであろう。

そこで今回は、研究も進んでおり、かつ筆者が多少は理解できる欧米語（このことばはもちろん言語学的には問題があるが、欧米諸国で用いられている言語といった便宜的な意味である）で書かれたものを取り上げて、上記の問題を考えてみたい。

## 二、欧米における日本中世文学の研究・紹介はどの位盛んか

初めに筆者の個人的な統計を報告する。この十年余り、手近な新聞記事で海外あるいは外国人の日本文学の研究・教育・受容の状況や日本文学の外国語訳などに関するものを、気づいた折々に切抜いてファイルしてきたが、今改め

〈表1〉

海外・外国語の日本文学関係新聞記事 (管見分)

区分	昭和四五年—五七年	昭和五八年	計
全般	九一	一八	一〇九
上古	七	一	八
中古	一四	〇	一四
中世	一五	〇	一五
近世	一二	四	一六
近現代	七〇	一三	八三
計	二〇九	四六	二五五

中世の内訳:

- 昭四五—五七 和歌二 連歌一 平家／平曲四 徒然一 徒然／能一 能二 幸若一 親鸞／歎異抄二 奈良絵本一
- 昭五八 連歌一 平家二 説話一 紀行一 能四 狂言一

てそれを数えてみたら、〈表1〉の如くであった。

もちろん筆者が目にして新聞の種類は多くない。この期間を通じて購読しているのは『朝日』『毎日』の二紙で、昭和五〇年頃までと五八年後半はこれに『読売』が加わるが、『東京』その他の新聞の記事は、ごく稀に偶然に入手したものであるだけである。そして、購読している新聞の記事にも時には見落したものもあるであろう。その程度に不確かな統計ではあるが、それでも大勢、特に相対的な量は、判るであろう。

因みに、ここに示した数字は、筆者が切抜いた新聞記事を貼った台紙の数であって、同一内容の記事が二紙以上に出た場合とか直接の関連記事とかは一枚の台紙に貼ってあるので、厳密に言えば記事の数(延べ数)とは少し異なる

けれども、大差はない。また、これらの記事の中には、中国やオーストラリアなどに関するものも少しはあるが、ほとんどは欧米もしくは欧米語に関するものである。

これを見ると、特定の時代に分け得ない「全般」に次いで近現代が多いことは予想通りであるが、いわゆる古典時代について見ると、中世文学に関するものが他の時代より多く、特に昨年（昭和五十八年）一年間は、それが甚だ顯著である。念のために言うと、ここには筆者の専攻や関心による偏りは無いと言ってよい。筆者は、日本文学と言わず日本文化（芸能・民俗・宗教・美術・歴史等々）と外国人との関わりとか、その海外での受容・研究とかに関する記事は、努めて洩らさずに拾ってきたつもりだからである。

また、分類というのはむずかしいもので、中世文学と分類したものの中には平曲とか能・狂言などの芸能にわたるものがあり、それ故に他の時代より多くなるだろうとの推測もあるかも知れない。しかしその点は浄瑠璃・歌舞伎を抱える近世文学も同じことであり、かつ中世にしても近世にしても、記事内容のウェイトがそれらの文学よりは芸能としての側面にあるものは、多くは別のところ（日本文化）へファイルして、この表の中には数え入れてない。そのことも断っておく。

右のように、海外や外国人の日本の中世文学に対する関心は、日本文学の中で、特に日本古典文学の中では、相当の比重を占めているが、それは一体いかなる理由によるのであろうか。かつては、欧米人などは日本の文学や文化に好んで彼等のと異質なものを求め、いわば異国趣味の目で見ようとしたため、自然に王朝や中世といった、現代から遠い時代のものに人気があり、近現代作家でも漱石・鷗外のような理知的な、ある意味で西欧的な側面の強いものは、谷崎・川端といった情趣的な作家に人気があるのだと言われた。昨今はそうとも言いきれないが、やはりそうした面も確かにあるであらう。

大体、こうした現象の原因・理由を追究することは容易でない。われわれとしては、その原因・理由の中に日本文化・日本文学の特徴を探ることができると思うので、その追究はもちろん重要であるが、今はそうした追究よりも、欧米や欧米語における日本中世文学の受容の実態を、もう少し具体的に見てみたい。

そこで次に、欧米語で書かれ出版された日本中世文学の翻訳・研究・紹介に、どんなものがあるかを見てみる。特に今回は、第二次大戦後に出版(再版・復刊を含む)されたものに限り、それらを内容のジャンルと使われている言語とによって分けて(表2)を作ってみた。無論一個人の管見であるから遺漏も少なくないであろう。例えば、新聞記事(昭五四・一・一六『朝日』夕刊)で見た大河内了義氏の『歎異抄』の独訳は、書誌類でも未見である。しかし手許にないものでも、文献目録類で見出した限りは挙げておいた。

ただ、雑誌紀要論文まで拾うと相当の数になって煩わしいため、単行本の形で出たものだけを挙げたが、本当を言うと、多くのすぐれた雑誌論文を落したのは、甚だ遺憾である。日本でもそうであるが欧米でも、単行本と雑誌論文とに質の上下があるわけではなく、一度雑誌に掲載されたものが後日ほとんどそのままの形で単行本になることも稀ではない。特に *Monumenta Nipponica* の如きは、連載・分載されたものがやがて一冊のハードカバー(*Monumenta Nipponica Monograph*) となって刊行されること多く、(表2)の中のブラワー Robert H. Brower 教授の「定家の正治百首」やウィルソン William R. Wilson 氏の『平治物語』などもその例である。MN (*Monumenta Nipponica*) とか HJAS (*Harvard Journal of Asian Studies*) とか *Nachrichten (der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens Hamburg)*、ハンブルク東アジア自然・民族学協会『会報』とかいった、広く読まれ、レベルも高い雑誌に載った論文は、例えばドイツの学位論文に多い私家版的・限定版的に出版されたもの——表に挙げた中では『御伽草子』『とはすがたり』『幸若舞』などの例がある——と比べても、どちらが多く学界を益しているか、

学の翻訳・紹介・研究(未定稿)  
を含む)の単行本のみ—

(1)  
(2)

仏 語	露 語	そ の 他
<div data-bbox="181 519 630 649" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>? = 未見 無印 = 翻訳を主とするもの * = 研究・解説を主とするもの ** = 創作 書名の後の数字は刊年の西暦下二桁</p> <p>pb=paperback form rev.=revised rp=reprint tr.=translated by</p> </div>	<p>V. Markova. <u>Saigyo: Gornaya hijiya</u> &lt;=Mountain Hut&gt;. 79.</p>	<p>M. Muccioli. <u>Fujiwara Teika (1162-1241): La centuria poetica</u> &lt;Ital.=The Poetic Hundred&gt; Hyaku-nin isshu. 50.</p>
<p>** C. Roy, pr. <u>Renga: poème par Octavio Paz, Jacques Roubaud, Edoardo Sanguineti et Charles Tomilson.</u> 71.</p>		



<p>R. Sieffert. <u>Le dit de Hôgen/Le dit de Heiji</u>. 76.</p> <p>R. Sieffert. <u>Le dit de Héike</u>. 76.</p>	<p>I. L'vova. <u>Povest' o dome Taira</u> &lt;=<u>The Story of the House Taira</u>&gt;. 82.</p>	
<p>H. O. Rotermond. <u>Ichien Mujû: Collection de sable et de pierres</u>, <u>Shasekishû</u>. 79.</p>	<p>*G. G. Sviridov. <u>Yaponskaya srednevekovaya proza</u> &lt;=<u>Japanese Medieval Prose</u>&gt; <u>Setsuwa</u>. 81.</p>	
<p>C. Grosbois &amp; T. Yoshida. <u>Urabe Kenkô: Les heures oisives (Tsurezure-gusa)/S. Candeau. Notes de ma cabane de moine (Hôjô-ki)</u>. 68.</p>	<p>V. N. Goregliad. <u>Kenko-Hoshi: Zapuski ot skuki</u> &lt;=<u>Notes from Boredom</u>&gt; (<u>Tsurezure-gusa</u>). 70.</p>	<p>T. Kristeva. <u>Nijo: Nechakana povest</u> &lt;<u>Bulg.=Unasked Story</u>&gt;. 81.</p> <p>? L. Origlia. <u>Nijo: Towazugatari, Diario di una concubina imperiale</u>. 81?.</p> <p>M. Novák et al. <u>Zápisky z volných chvíl</u> &lt;<u>Czech.=Notes from Free Whiles</u>&gt; (枕・方丈・徒然の抄訳). 84.</p> <p>M. Muccioli. <u>Kenko Hoshi: Ore d'ozio</u> &lt;<u>Ital.=Hours of Idleness</u>&gt; (<u>Tsurezuregusa</u>)/<u>Kamono-Chomei: Ricordi della mia campana</u> &lt;=<u>Records of my Hut</u>&gt;. 65.</p> <p>D. Keene (tr. A. Motte). <u>Kenko: Momenti d'ozio</u> &lt;<u>Ital.=Moments of Idleness</u>&gt;. 75.</p>

欧米における日本中世文学の研究と紹介 (福田)

<p>歴史物語 軍記物語</p>	<p>? W. G. Perkins. <u>A Study and Translation of Masukagami</u>. 75. W. R. Wilson. <u>Hōgen Monogatari: Tale of the Disorder in Hōgen</u>. 71. <u>The Ten Foot Square and Tales of the Heike</u>. See below. H. Kitagawa &amp; B. T. Tsuchida. <u>The Tale of the Heike</u>. 75(pb 77). H. D. McCullough. <u>The Taiheiki: A Chronicle of Medieval Japan</u>. 59(rp 76, pb 79). H. D. McCullough. <u>Yoshitsune: A Fifteenth-Century Japanese Chronicle</u>. 66(pb 78). H. P. Varley. <u>The Onin War: History of its Origins and Background, with a Selective Translation of the Chronicle of Onin</u>. 67.</p>	
<p>説話文学</p>	<p>D. E. Mills. <u>A Collection of Tales from Uji: A Study and Translation of Uji Shūi Monogatari</u>. 70.</p>	<p>H. Eckhardt. <u>Das Kokonchomonshū des Tachibana Narisue als Musikgeschichtliche Quelle</u>. 56.</p>
<p>日記紀行文学 随筆文学 史 話 法 語</p>	<p>H. Plutschow &amp; H. Fukuda. <u>Four Travel Diaries of the Middle Ages</u>. 81. K. Brazel. <u>The Confessions of Lady Nijō</u>. 73(rp 75, 75). W. Whitehouse &amp; E. Yanagisawa. <u>Lady Nijo's Own Story Towazu-Gatari: the Candid Diary of a Thirteenth-Century Japanese Imperial Concubine</u>. 74. A. L. Sadler. <u>The Ten Foot Square and Tales of the Heike: Being Two Thirteenth-Century Japanese Classics, the "Hōjōki" and Selections from the "Heike Monogatari"</u>. 28(rp in pb 72). W. N. Porter. <u>The Miscellany of a Japanese Priest: Being a Translation of Tsure-zure Gusa</u>. 14(rp in pb 74). D. Keene. <u>Essays in Idleness: The Tsurezuregusa of Kenko</u>. 67(pb ?, 81). D. M. Brown &amp; I. Ishida. <u>The Future and the Past: A Translation and Study of the Gukanshō, an Interpretative History of Japan Written in 1219</u>. 79. H. P. Varley. <u>A Chronicle of Gods and Sovereigns: Jinnō Shōtōki of Kitabatake Chikafusa</u>. 80 ? R. Masunaga. <u>A Primer of Soto Zen (Shobogen-zō Zuimonki)</u>. 71.</p>	<p>R. Krempien. <u>Towazugatari: Übersetzung und Bearbeitung eines neugefundenen literalischen Werkes der Kamakura-Zeit</u>. 73. O. Benl. <u>Betrachtungen aus der Stille: Tsurezuregusa</u>. 63. E. Ikeyama. <u>Tannishō: das Buchlein vom Bedauern des abweichenden Glaubens</u>. 65.</p>
<p>漢 詩 文</p>	<p>? M. Ury. <u>Poems of the Five Mountains: An Introduction to the Literature of the Zen Monasteries</u>. 74. ? * S. Arntzen. <u>Ikkyū Sōjun: A Zen Monk and his Poetry</u>. 73. * J. H. Stanford. <u>Zen-Man Ikkyū</u>. 81.</p>	



欧米における日本中世文学の研究と紹介 (福田)

歌 謡	<p>F. Hoff. <u>Like a Boat in a Storm: A Century of Song in Japan.</u> 82.</p> <p>F. Hoff. <u>The Genial Seed: A Japanese Song Cycle.</u> 71.</p>	
<p>芸能文学 能・能楽論</p> <p>狂 言</p> <p>幸 若 舞</p>	<p>E. Pound &amp; E. Fenollosa. <u>The Classic Noh Theatre of Japan.</u> 17(rp59, pb 79).</p> <p>A. Waley. <u>The Nô Plays of Japan.</u> 21(fp in pb 76)</p> <p>* P. G. O'Neill. <u>Early Nô Drama: its Background, Character and Development, 1300-1450.</u> 59(rp?)</p> <p>* P. G. O'Neill. <u>A Guide to Nô.</u> 54(rev. 64).</p> <p>? Nihon Gakuzyutu Sinkokai. <u>Japanese Noh Drama: Ten Plays from the Japanese.</u> 3v. 55-60(rp <u>The Noh Drama etc.</u> 60?).</p> <p>D. Keene. <u>Twenty Plays of the Nô Theatre.</u> 70.</p> <p>* F. Hoff &amp; W. Flindt. <u>The Life Structure of Noh: An English Version of the Structure of Noh.</u> 73.</p> <p>? M. Ueda. <u>The Old Pine Tree, and Other Noh Plays.</u> 62.</p> <p>S. Matisoff. <u>The Legend of Semimaru: Blind Musician of Japan.</u> 78.</p> <p>? M. Bethé &amp; K. Brazel. <u>No as Performance: An Analysis of the Kuse Scene of Yamamba.</u> 78.</p> <p>C. Shimazaki. <u>The Noh. Vol. I God Noh.</u> 72, vol. III <u>Woman Noh Book 1-3</u> 76-82.</p> <p>T. Nogami (tr. R. Matsumoto). <u>Zeami and his Theories on Noh.</u> 55?(rev. 73).</p> <p>C. Sakurai. <u>The Secret of Nô Plays: Zeami's Kadensho.</u> 68(rp/cor. 69).</p> <p>? N. Asaji. <u>Kadensho, or The Flower Book of Noh.</u> Art. 75.</p> <p>? S. Shimada. <u>The Fushikaden.</u> 75.</p> <p>* D. Kenny. <u>A Guide to Kyôgen.</u> 68.</p> <p>S. Sakanishi. <u>Japanese Folk-Plays: The Ink-Smeared Lady and Other Kyogen.</u></p> <p>* * D. Riche. <u>Three Modern Kyogen.</u> 72.</p> <p>* J. T. Araki. <u>The Ballad-Dance of Medieval Japan.</u> 64(pb 78).</p>	<p>E. Pound &amp; E. F. Fenollosa (tr. S. Eisenstein). <u>No, vom Genius Japans.</u> 63.</p> <p>? * H. Bohner. <u>Gestalten und Quellen des Nô.</u> 55.</p> <p>? * H. Bohner. <u>Nô. Die Einzelnen Nô.</u> 56.</p> <p>? * H. Bohner. <u>Nô. Einführung.</u> 59.</p> <p>? O. Benl. <u>Seami Motokiyo und der Geist des Nô-Schauspiels, geheime kunstkritische Schriften aus dem 15. Jahrhundert.</u> 53.</p> <p>H. Bohner. <u>Seami (Zeami), Blumenspiegel (Kwakyô, Hana-no-kagami).</u> 2Bd. 53-54.</p> <p>? H. Bohner. <u>Seami, Buch der Nô Gestaltung.</u> 54.</p> <p>H. Bohner. <u>Seami, Shû-dôsho/Kyakuraikwa: Schriften der dritten Schriftumsperiode des Meisters.</u> 61.</p> <p>? P. Weber-Schäfer. <u>Vierundzwanzig Nô-Spiele.</u> 61.</p> <p>? P. Weber-Schäfer. <u>Ono no Kamachi: Gestalt und Legende in Nô-Spiel.</u> 62.</p> <p>R. Schneider. <u>Kôwaka-Mai: Sprache und Stil einer mittelalterlichen japanischen Rezitationskunst.</u> 68.</p>
そ の 他	<p>T. &amp; T. Izutsu. <u>The Theory of Beauty in the Classical Aesthetics of Japan.</u> 81.</p>	

優劣はつけがたい。

そういった、単行本にまだならない雑誌紀要論文であるために今回の表に現れていないものも思いつくまじくいくつか例示すれば、先ず英文ではブラワー教授の『後鳥羽院御口伝』の訳と研究 (HJAS) や S・カーター Stephen Carter 氏の和歌連歌などの論考 (MN) 、E・カトマ Eileen Kato 氏の『筑紫道記』の訳 (同) 、ミルズ Douglas E. Mills 博士の『曾我物語』『神道集』等の論やナンフリッジ本『風の草子』の訳 (共に MN) 、W・マッカラウ William H. McCullough 教授の『承久記 (慈光寺本)』の訳や『吾妻鏡』に見える承久の乱の記事の研究 (同上) 、オニーン P. G. O'Neill 教授の『夢跡一紙』の訳と世阿弥生誕年についての表氏説批判 (MN) 、ニフマン Mark J. Neuman 氏の『花鏡』の訳 (同) 、J・マラキ James T. Araki 教授の『文正草子』の訳や『百合若』論 (共に MN) その他多数があり、T・ローリック Thomas H. Rohlig 氏の英訳『浜松中納言物語』 (A Tale of Eleventh-Century Japan: Hamamatsu Chumagon Monogatari. Princeton Library of Asian Studies, Princeton University Press, 1983) の解説には、『無名草子』についての必要な限りの考察・引用もある。謡曲の訳は多い。

英語以外は数もぐんと減るが、独文で思い出すものに W・ナウマン Wolfram Naumann 教授の『撰集抄』の訳 (Er Oriens, 未完か) があり、仏文では J・ピシヨール Jacqueline Pigeot 教授の『横笛草子』の訳と研究 (Bulletin de la Maison Franco-Japonaise 『日仏会館学報』) が、ロシア語では故コンラッド Nikolai I. Konrad 教授の『方丈記』の訳 (一九二〇年頃) と研究 (一九一七・一九二五) とが、遺著として出た『伊勢物語』の訳と研究 (Ise Monogatari, Izdatel'stvo < Nauka >, Moskva, 1979) を併せ収められているのが思い出される。

そういった事情をも念頭に置いて、表々々を見ると、欧米人の研究や翻訳は、中世文学の全ジャンルについて、あまり偏らずに進められていることが分る。中では、擬古物語・御伽草子や歴史物語がほとんど手着かずで、軍記物語

や史論なども遅れているが、これは主として作品の分量と日本での注釈の有無が関っていると考えられる。現代日本語による注釈のないものは、群書類従にせよ国史大系にせよ、活字本の本文からであっても、外国人が文意を理解することは、通例かなり困難である。また分量の問題と言うのは、この表に見るような業績の多くが学位論文を母胎としているので、研究に従事する期間にある程度の制約のあることが多い上に、またそれを出版する段階でも、分量の多いものが不利であることは想像に難くない。

今、この表に示したものの多くが学位論文を基にしていると言ったが、学位論文はその性質上、前人未踏のものが要求される。従って特に翻訳の場合、まだ誰も（少なくともその言語では）公刊していないものを手がけるのが先ず通例で、さきに見たように中世文学の研究・翻訳がかなり広く各ジャンルに行きわたっているのも、実はそうした事実と無関係ではない。

ところで、アカデミックな研究と一般への紹介とは、必ずしも両立しないものでもないが、通例どちらかにウェイトが置かれがちであり、また置かれざるを得ない場合も多い。ここに挙げたのは原則としてアカデミックな研究を主としたもので、中に若干『能入門』『狂言入門』といった、日本文学愛好家と言うよりも日本文化に関心を持つ人々のために書かれた入門・解説書も、著者が著名な学者である場合には入れておいたが、能・狂言や歌舞伎・文楽などにこうした入門・解説書が多いのは、雅楽・生花・書といった、文学以外の各ジャンルと同様である。今回はここでも、ある程度文学としてのウェイトがあるものに絞ろうとしたが、こうした芸能文学の宿命上、その辺はあまりうまく処理できてはいない。

もう一つ、説話文学や御伽草子の翻訳・研究は、少なくとも筆者の知る範囲では、表に見るように甚だ少ないが、日本の昔話（いわゆる民話）の翻訳と言うか、英文で書いたものは、かなり多い。最近出た J・カーカップ James

Kirkup 教授の *Folktales Japanese* (『日本むかしばなし』、徳永鵬三解説注釈、研究社小英文学叢書、昭五二) もその一つであるが、その「はしがき」に徳永氏も挙げられている。A. B. Mitford (Lord Resedale) : *Tales of Old Japan* (1871, Tuttle edition 1966) や Yei Theodore Ozaki : *The Japanese Fairy Book* (Tuttle edition 1970) もその他であって、『舌切雀』『桃太郎』『かちかち山』等を収め、殊にオザキ氏のは『浦島太郎』『羅生門』なども入っている。また『今昔物語』より」という邦題を有する Hiroshi Naito (retold) : *Legends of Japan* (Tuttle edition 1972) には、“The iron hat” と題して『徒然草』第五三段の仁和寺の法師の話が訳出されている (そしてカーカッパ教授はそれを参考にして “The Legends of Ninjai Temple” 二話の第二を書いている)。けれどもそれらは中世文学としての御伽草子や説話文学の翻訳・紹介とは言えないので、この表には入れてない。

この表で特に注意したのは、\* \* を付した二つの作品である。一つは仮称「レンガ」、一つは新作狂言で、「レンガ」の方は『文学』の〈外国人の日本文学研究〉特集(昭五七・一二)に大岡信氏が詳しく紹介しているが、新作狂言「完璧な家来達」The Perfect Servants」「魔法のふんどし」The Magic Fundoshi」「場違いの女神」The Misplaced Goddess」の三番) は、狂言を実にうまく真似て英語でパルスを創ったもので、実演しても好評だったようである。日本中世文学の、そしてそれが共に芸能にまたがる二つのジャンルが、欧米の現代芸術に一つの新しい方法を導入する契機になっているとしたら面白い。

### 三、そこに「中世文学」という捉え方はあるか

以上のように、欧米の日本文学研究では、中世文学の個々の作品に関して、ほとんどジャンルに偏らず研究や紹

介が盛んであり、ジャンルとしての研究もある程度見ることができが、中世文学を全体として捉えたものや中世文学の本質を論じたもの、少なくともそれをもって一冊の単行本の形にしたものは、まだ無いようである。〈表2〉に「中世文学全般」の欄を設けなかった所以である。

大体、「中世」という語を、日本文学史の時代区分に、彼等は必ずしも多く用いない。「中世」の語はドイツ語では *Mittelalter*、フランス語では *Moyan age* であろうが、英語文献での実例が *Medieval (Japan)* の他に *Middle ages* もあり、殊に「何々世紀の」と記すのが多いのに気づく。彼等が「中世」と言わず「何々世紀の」と言うのは、彼等がヨーロッパの（例えば英独仏露などの）文学史を考えるときの普通の習慣が出るものか、それとも彼等は当面研究した作品作家以外の日本文学史の流れや時代区分について敢えて物議をかますような用語を使わず逃げる——良く言えば謙虚な姿勢を示す——のか、あるいはまた、日本の中世文学がヨーロッパの中世文学とは相当に異質であるために、敢えて「中世」の語を避けようとするのか、その辺は筆者にはよく分らないが、ともかく表題に「中世」の語を含むものが少ないことは事実である。

因みに、「中世」及び「足軽」「預所」以下の日本中世史研究における概念と術語の翻訳に関しては、一九八一年八月ワシントン大学に日米の専門家九名（日本からは速水融・石井進・黒田俊雄・永原慶二の四氏）が集って開かれた研究会の成果に基づく、ジョン・ホール *John Whiney Hall* 教授の “Terms and Concepts in Japanese Medieval History: An Inquiry into the Problems of Translation” (*Journal of Japanese Studies*, Winter 1983) が詳しい有益である。

欧米語で刊行される日本中世の作家・作品あるいはジャンルの研究や翻訳の表題に「中世」の語を用いるものが少ないのは、既刊の欧米語による日本文学のアンソロジーや欧米語で書かれた日本文学史における時代区分の名称とも

関係がある。欧米における日本文学史研究については、いずれ通観してみたいと思うが、姑く欧米語の主要な日本文学史や選集を見ると、周知の通り欧米語による最初の日本文学史はW・G・アストンの一八九九年のものであるが、そこには、「第四篇(注、巻Bookを「篇」と訳しておく。芝野六助は「編」としている)——鎌倉時代 Kamakura Period (一一八六—一三三三)(学芸の衰返 Decline of Learning)」「第五篇——南北朝及び室町時代 Namboku-cho and Muromachi Periods (一三三三—一六〇三)(暗黒時代 Dark Age)」と並び、「中世」の語はない。しかし、この文学史が今や歴史の意味しか持たないことも周知である。

もう一段新しいK・フロレンツの『日本文学史』(一九〇六)は、平安初期から室町(安土桃山を含む)末までを大きく「中世 Mittelalter」とし——斎藤清衛博士の『中世日本文学』よりは大分古い——、それを前後二期に分けて、平安時代を「古典主義時代 Zeitalter der Klassizität」、鎌倉及び室町時代を「擬古典時代で宮廷文学の崩壊 Nachklassische Zeit und Verfall der höfischen Literatur」としている。

もう一歩進んで、戦前の欧文日本文学史の最高峰と言わべきW・グンデルトの『日本文学』(一九二九)では、第一期 (I. Periode) すなわち上代を「日本文学の始原と最初の開花 Anfänge und erste Blüte der japanischen Literatur」、第二期すなわち平安時代を「平安時代の宮廷文学 Die höfische Literatur der Heianzeit」と規定した後に、第三期を「仏教的武家的特質の文学 Die Literatur im Zeichen des Buddhismus und des Rittertums」と称して、鎌倉・南北朝時代をその前期、室町時代をその後期としている。そしてその特質が要領よく説かれているが、この辺には尾上八郎博士の『日本文学新史』(大正三三—一九一四)や津田左右吉博士の『国民思想の研究』(大正五一—〇)戦前には第四巻『平民文学の時代中』まで、特に後者の影響はあろう。

戦後、欧米人の日本文学研究・理解に最も大きな寄与をしたのは、D・キーン教授の『日本文学選集』と『日本文

学(論)』であるが、後者(『日本文学』)は、周知のように詩歌・小説・戯曲の三形態に分けて日本文学の特質を分析したもので、時代区分論は見られない。『選集』の方は、一般への配慮もあるうが、「鎌倉時代 Kamakura Period (1185-1333)」「室町時代 Muromachi Period (1333-1600)」とあって、目次には「中世」の語は見られない。ただ、解説 (Introduction) には「別離は日本の中世——鎌倉及び室町時代の作品に一貫したテーマである」(Separation is a constant theme in the writings of the Japanese medieval period —— the Kamakura and Muromachi periods.) とあって、「中世 Medieval period(s)」の語が見える。けれども、それは時代区分名称の言い換えに過ぎず、入門的な書物の故もあってか、この時代の文学の特質についての多少の記述(後述)はあるものの、いかなる意味で「中世」と称し得るのか、あまり深い議論は見られない。

時代区分名にほとんどいわずゆる政治史区分が用いられている中で、管見の中で章立てに「中世」の語が見えるのは、L・マニーノ Leo Maggino 氏の伊文『日本文学史』(一九五七・二版)と、ビッシュー教授らのクセシユ文庫の『日本文学(史)』(一九八三)である。ただ、前者は平安時代・鎌倉時代の次に「中世 II Medioevo (1349—1603)」と題する章を置いているが、実はこれは、次に「徳川時代」と来るのからも分るように、南北朝・室町・安土桃山時代の言い換えに過ぎず、恐らく章題を簡潔にするためにつけられたものであって、この時期を特に「中世的」と捉えたのではなさそうである。そのことは後者(クセシユ文庫)でも同じで、こちらは平安時代と徳川時代との間に「中世 Le moyen age」を置いているが、特に「中世」の概説・総論はなく(これは他の時代でも同じである)、「やはり「鎌倉室町時代」の言い換えと見てよめようである。

西独のB・レヴィン教授は、教材用に原文による『日本文学選』を編み、その注解も著しているが、その本文篇(日本語原文)の方の目次には、今日われわれが普通に用いる「中世」「近世」の語が用いられている。しかし、注解

篇の方を見ると、「中世文学 Mittelalterliche Literatur」の後に括弧して「鎌倉室町時代 Kamakura-Muromachi Zeit」と付している。上代・中古等も同様であるが、欧米の学生・読者に対しては、こうすることが必要なのである。

以上概観したように、欧米の日本文学史の時代区分名称は、いわゆる政治史的区分が優勢である。「中世」という語が無いわけでは無いが、それは常に「鎌倉室町時代」と付記して用いられるものとなっている。これは主として、古代・中世・近世とか上代・中古・中世・近世とかいった、いわゆる相対時間による区分あるいは抽象的時代区分の名称がまだ十分に浸透していないことによるのであろう。日本でも、文学史の時代区分に「中世」の語が登場したのは昭和の初め頃かと思われ、『日本文学聯講 第二巻 中世』(昭二)などが古い例であらう。それでも、この論集の冒頭でこの時代を概観した久松博士の論題は「近古文学の概論」とあり、「近古文学は古代文学と近世文学との間に位する文学であって、又之を中世文学とも言はれるのであり、政治上からいへば鎌倉室町時代に現れた文学である」という説明もある。国文学者以外では平泉澄博士の『中世に於ける精神生活』(大正一五)が古く、しかも保元の乱から中世とするなど、久松博士に影響している。しかし一方で、戦前に普及した次田潤博士の『国文学史新講』(昭七―一一)や戦前で最も詳しい東京堂の『日本文学全史』なども「鎌倉(時代)」「室町(時代)」といった区分を用いており、日本文学史書の章又は巻を「上代・中古・中世……」と広く題するようになったのは戦後のことであって、久松博士編『日本文学史入門』(昭二四)や至文堂の『日本文学史』(昭三〇―三五)などが、比較的早い例であらう。

ただ、個別の研究書の表題には、昭和十年頃から「中世」の語も用いられてきた。斎藤博士の『中世日本文学』(昭一〇)が平安から江戸前半を扱っていることは周知であるが、同じ頃斎藤博士は『近古時代文芸思潮史 応永・

永享篇』(昭一一)と題する著書を出しており、そこには「中世」と「近古」と使い分けが見られるようで、斎藤博士のケースは別に処理した方がよい。

ほぼ鎌倉室町時代に当る概念として「中世」を用いた早い例としては、『国語と国文学』昭和六年十月の特集「中世文学号」があり、次いで(以下敬称略)、阪口文章『思想を中心としたる中世国文学の研究』(昭九)、久松『中世に於ける文学道の建立』(昭一三)、風巻景次郎『中世の文学伝統』(昭一三)、荒木良雄『中世文学の形象と精神』(昭一四)、石田吉貞『中世草庵の文学』(昭一六)、後藤丹治『中世国文学研究』(昭一八)、築瀬一雄『中世日本文学序説』(和一八)、永積安明『中世文学論』(昭一九)、釘本久春『中世歌論の性格』(昭一九)等と続き、戦後の永島福太郎『中世文芸の源流』(昭二三)、久松『中世和歌史序説』(昭二三)、太田水穂『日本和歌史論 中世篇』(昭二四)以下、戦前戦後を通じて多くを数える。

特に記憶すべきは、西尾実『日本文学史における中世的なもの』(昭二九)が契機になったかの如く、昭和三十年前後、日本文学史における「中世」とはいかなる時代か、また「中世」の初めと終をどこに置くべきか、中世文学の本質は何か、といったようなことがしきりと議論されたことで、二十九年十月には『国語と国文学』が「日本文学史における中世の成立」という特集を編んでおり、前述の至文堂の『日本文学史 中世』の冒頭でも、編集担当の市古博士によって中世の始終が論じられている。昭和二十八年に結成された中世文学会でも、初期にはしばしばこうした点が議論されたものであった。その結果、今では日本の研究者の間では、中世文学や「中世」についての共通概念が大凡はできているように思うが、欧米の学者には、そうした議論を見ない。唯一つ管見に入ったのはE・プツァー Edward Putzar 氏の『日本文学——史的概説』(*Japanese Literature: A Historical Outline*. The University of Arizona Press, 1973)で、目次及び扉面に「中世」(Medieval Period A.D. 1185 to 1600)とあり、その概説は

当る節を「鎌倉室町時代」と題した上、「中世文学」の概念 (The concept of a "medieval literature") についての議論も見られるが、実はこれは久松博士編『日本文学』(有信堂、昭三五)の訳で、彼等としての論ではない。

彼等の中には、日本文学史に相当あるいは極めて精通して、その時代ごとの差異特質を把握しているすぐれた学者もいる。例えばキーン教授は、前にもふれた『日本文学選集』の解説において、収めた作品にふれつつ日本文学の特質を史的に通観しているが、『新古今集』の条では当時(鎌倉時代)の詩歌に「陰鬱と孤独」(the gloom and solitude)が見出されると言い、特に当時の代表的歌人西行の歌は、「言語における最も美しく愁わしいもの」(the most beautiful and melancholy in the language)であると語っている。

続いて教授は、「同様な憂愁」(the same melancholy)が『平家物語』に見られ、特に記憶に残るのは少年敦盛の死や山里の女院の生活の描写に見る「淋しさと悲しみ」(loneliness and sorrow)であるとか、平安貴族も口にはしたが実感を持たなかった「世の無常」(the vanity of worldly things)が破壊と災害の口に意味を獲得して、鴨長明の『方丈記』に「われわれは中世の闇の奥からの叫びを聞く」(we hear a cry from the heart of medieval darkness)とかの語も見られる。

この次に、同選集に採った『増鏡』の一節(「久米の皿山」のほとんど全文、後醍醐帝の隠岐遷幸など)にふれて前引の「別離は」云々の語が出るのであるが、政治的事情から都を離れざるを得なかった南朝の君臣などと別に、「世を背いて自ら各地に隠遁した人の多い」(there were many men who fled the world in disgust, voluntarily seeking refuge in one or another remote place) ことと指摘して、『徒然草』の解説に移っている。

キーン教授の中世文学概論は、このあと「死と死者の世界」(death and the world of the dead) という語から能の解説に入っていくのであるが、今はこれ以上引用する必要はあるまい。このように要を得た中世文学概観が欧米の学

生や一般読者に提供されていることを知って、われわれは一応喜んでよいであろうが、この節の初めにも述べたように、こうした広い視野の発言をしている欧米の学者は決して多くない。尤も前述のように学位論文を仕上げた程度の段階では、特に学位論文が相当の深さと独創性を要求するだけに、そうした広い視野を望むのは無理かも知れない。

それでも、個別研究の中に、その作品やジャンルの特質を論じて、それがわれわれの目から見て中世的特質の指摘・把握になっているものも少なくない。以下、やや偶然的に目にふれた、そうした言説を例示してみる。

かつてわれわれの間で「古代の落日」か「中世の光輝」あるいは曙光(「かが論じられた『新古今集』を独訳(共訳)してレクナム文庫に収めたH・ハンミッチ Horst Hammitzsch 教授は、その解説(Zur Einführung)で和歌史叙述に力を入れ、同集の中世的性格にはほとんどふれていないが、一言「あらゆる精神文化の領域にかすかな変化をもたらした新時代の初めだ」(am Beginn einer neuen Zeit, die auf allen geistigen Gebieten einen spürbaren Wandel bringt) 成った集と言っている。

訳書に「中世」の語を入れた数少ない学者 H・ブルチュウ Herbert E. Putschow 博士は、紀行文学が中世に多い原因として政権の公武二分とそれによる全般的な不安を挙げ、また中世文学を支配した仏教思想・神仏習合思想や和歌陀羅尼観などが当時の仏徒や隠者に文学へ走らせたと言っている。

中世文学に隠者の活躍や無常観を見ることは、日本の学者に導かれてであろうが、特に軍記・日記・随筆文学を扱った人の解説にはよく見られ、例えば O・メンル Oscar Benl 教授の独訳『徒然草』(Yoshida Kenko: Betrachtungen aus der Stille: Tsurezuregusa. Insel, 1963) の「あふなき」(Nachwort) に見える兼好伝は、南朝に仕えたなど戦前のメンルだが、兼好が「世の無常を深く感じ」(er ist sich der Vergänglichkeit allen Lebens tief bewusst) 云々と書

かたづらる。V・N・コントリノーヤ Vladimir N. Goregliad 博士の論文『徒然草』(Kenko-Hoshi: Zapiski ot skuki [Tsurezuregusa]. Izdatelstvo [Nauka]. Moskva. 1970) の英文要録 (Summary) に於いて、この作品を眞へ野趣が三つあると言ふ。「仏教的無常観」(the Buddhist idea of the frailty, vanity, ephemeral nature of all earthly things)、「退中野趣」(the idea of regression in the historical process)、「夢」(「この世のやまば」の觀念) (the idea of universality of the *mono-no aware*—the enchantment of things) といふ三つである。

それらに対して、題名で「中世」の語を有するG・G・スヴィリドフ Georgy G. Sviridov 氏の『日本の中世散文 総論』(Yaponskaya srednevekovaya proza setsuwa. Izdatelstvo [Nauka]. Moskva. 1981) に於て「中世」という語は時々出るが、その定義や「中世的性格」の検討は見られぬようである。この本のウエイトはむしろ「說話」のジャンルの位置の検討にあり、高橋貢・志村有弘・春田宣の三氏の各著書における各説話集の論がたびたび引用されている。

ジャンル論は他でも盛んで、特に中世と限らないが、日記文学は彼等がごく近いものを持たない故に、そのジャンル定位が関心を引くようである。I・I・ツリシタワ Tsvetana Kristeva 博士のブルガリア語『とはずかたり』(Nizko: Nchakana povest. Izdatelstvo "Christo G. Danov". Provdiv. 1981) の対象が一般読者人だからでもあろうが、その解説 (predvovor ≡ foreword) では日記文学論でかなりの筆をめぐっており、J・P・ビシヨール教授の大著『道行文』(Michiyuki-bun, Edition G.-P. Maisonneuve et Larose. Paris. 1982) の末尾にも「付録I」として「ジャンル」としての日記の問題」(Le probleme de *nikki* comme genre) があつた(『国語と国文学』昭五七・八)。

〈表〉くに挙げたダネス氏の『中世短篇小説お伽草子の日本語(国語)史的研究』やシムニール教授の『中世の能

と狂言』は、タイトルには「中世」のとあるが、いかなる点で中世なのか、成立が室町期であることの他には特に説くところはないようである。

#### 四、おわりに

以上概観したように、日本の中世文学は、かなり多くのジャンル・作品にわたって欧米語に翻訳され、殊に詩歌・物語・謡曲などには一般向きの翻訳も多い。特に今回は、最近の傾向や趨勢を知るためばかりでなく、現在一般読者や専門家が入手しやすい、いわば流布しているものを中心に見ることが必要と考えて、〈表2〉には前述のように戦後新刊・復刊されたものに限って挙げたが、『百人一首』や『方丈記』『謡曲』などいくつかのジャンル・作品には、戦前にも多くの主として一般的翻訳があることも忘れてはならない。また専門学者による精密な翻訳や手堅い研究でわれわれに示唆を与えるものも少なくない。

しかしよく見ると、翻訳された言語も、英語に次いで独・仏語のは多少あるが、それにも手着かずのジャンルがあり、ロシア語以下となれば翻訳・研究が公刊されている作品・ジャンルの数は微々たるものとなる。筆者の調査が不備で目に入らなかつたものもいくらかはあるが、少なくとも日本文学に関心を持つ一般読者に提供されている翻訳やその国の日本学者の間で共有されている翻訳・研究が〈表2〉をそれほど上回るものでないことは、ソ連・チェコスロヴァキアなどいくつかの国について筆者がその国の専門家から得た情報からも言える。

しかしここにも日進月歩がある。英・米・独・仏（それにコンラッド教授以来のソ連を加えてもよい）などいくつかの国を除けば、日本文学の研究や紹介の歴史はまだ半世紀に満たず、むしろ今後に期待すべきである。そしてま

た、欧米語による日本文学の研究・翻訳の刊行は、このところ内外ですこぶる盛んである。それだけにわれわれは、できるだけその成果から汲むべきところを虚心に汲むと同時に、その所説・理解に対して、賛否いずれにせよ積極的に対応することを、同学の者として心がけたいと思うのである。